



episode 21 「てんごくのおとうちゃんへ」 息子より

投稿者 岡本 阿由美 さま(福岡県)



『てんごくのおとうちゃん』
長谷川義史 作
講談社 2008年

私が『てんごくのおとうちゃん』の絵本に出会ったのは、2016年の新沢としひこさんと、長谷川義史さんのライブでした。このお話を聞いた時に、2012年に亡くなった夫と、当時大学一年生だった次男のことが頭に浮かびました。私は保育士という仕事柄、時差勤務で早朝に出掛けたり、帰宅が遅くなったりの毎日、自営業だった夫は、都合をつけて保育園の送迎や晩御飯の用意をしてくれて、とても子育てに協力的でした。

絵本のなかでは、キャッチボールやウクレレ、どつかれたこと、そして、飛行機ショーを見に連れていってもらったことなどの思い出が出てきます。お母ちゃんは買ってくれへんけど、お父ちゃんは買ってくれたライトパンのホットドッグ。

きっと息子たちにも、私がいなくお父さんとの思い出がたくさんあるのだと思います。しかし、高校生になった頃から三兄弟の中で、一番夫に反抗的な次男でした。自分の意見をはっきり言わないと気がすまない次男。「まあまあ落ち着いて」と何度も仲を取り持ったりしました。

絵本では、「お父ちゃんが亡くなった日は、冷たい雨が降っていました。」とありますが、夫が亡くなった日は、雪の降る日でした。大動脈解離で、あっという間に天国へ行ってしまいました。亡くなってからは、通夜、葬儀と決めなくてはならないことがたくさんあって、泣いてばかりもいられませんでした。そんな中、ずっとそばに寄り添ってくれたのは、次男でした。そして、思うところがあったのでしょうか。彼は、亡くなった父親に、一生懸命に手紙を書いていた。出棺前に、棺のなかにお花と一緒に、そっと入っていました。

今、息子は社会人となり、26才になりました。あの手紙のことは一度も聞いたことがありませんが、彼が父親になったときにこの絵本と一緒に読んで語り合いたいと思っています。

『絵本の日アワード in FUKUOKA 2019』投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



ことばも血肉も生粋の関西人作家です

『てんごくのおとうちゃん』は、20世紀の終わりにミレニアムデビューした絵本作家・長谷川義史氏の実話です。長谷川氏が子どものときに亡くなった父親の回顧録であり、わび状であり、思いのたけを詰め込んだ、いのちの絵本になります。

生まれも育ちも大阪は浪速っ子の長谷川義史氏は、作家活動においても故郷を題材にした作品を多く創作しています。とりわけ、長谷川氏が絵本でふんだんに表現しているのは、身体に沁み込んだ関西弁です。

関西弁語りは、長谷川氏単独の創作絵本に限ったことではありません。なんと、外国絵本の翻訳までを関西弁に変換するのです。イギリス人作家ジョン・クラッセン氏の『I WANT MY HAT BACK』を『どこいったん?』に、同帽子シリーズの続編を『ちがうねん』『みつけてん』(ともにクレヨンハウス)とタイトルまで関西弁にするのですから、それだけで思わず吹き出してしまいますし、読む前から期待値は高まるのです。

絵本作家だからできる使命があるのです

天国にいるお父ちゃんへの手紙を読み語る『てんごくのおとうちゃん』は、父親との数少ない思い出を関西弁敬語バージョンで話すのですから、ステレオタイプの関西弁が抜け、まったりとした不思議な空間があります。

長谷川氏が絵本作家を目指していた頃は、父をテーマにした絵本を描こうなどと思ってもしなかったのに、デビュー後、読者の反応が返ってきたとき、はじめて「お父さんのことを描かなきゃ」という思いが湧いてきたと振り返っています。

つまり、絵本作家になった頃は、仕事と家族を切り離していたけれど、作家として歩き出すと、読者という知らない人の反応を目の当たりにして、自らが「やらなければならないこと」、「やるべきこと」、「自分にしかできないこと」を発見し、父親が生きた証を残したいと考えるようになっていくのです。

絵本に登場させたら、「ここ」にいる

デビューを果たして、いくつか絵本を刊行した頃、講談社の創業100周年記念出版書き下ろし100冊企画の一冊に指名されるというチャンスが訪れるのです。

「亡くなって随分経っていて、父親のことをもう誰も知らない。でも、絵本を描き始めて、何か絵本に描いとけばこの形で残るやんと思って。誰も知らないんですけど、ここに登場させてあげたら、この人ここにいるじゃないですか」との思いで、「お父さんの話を描いてもいいですか」と編集者に提案したことを、後に語っています。

義史少年の自伝であり、長谷川家族のノンフィクション絵本でもある『てんごくのおとうちゃん』は、昭和時代にこんな家族がいたこと、平成・令和時代にこんなにユニークな絵本作家がいたことを、時代を超えて伝える伝承財なのです。そして、長谷川氏自身と父親は、絵本という媒体を借りて、いつまでもイキイキと生き続けるのです。

「生きた証」が絵本にある

亡くなった父親が主役の『てんごくのおとうちゃん』には、続編があります。自伝絵本第2弾は、直球の関西弁絵本『おかあちゃんがつくったる』です。

父親が亡くなった後の母子家庭で、大阪人^{おおさかじん}気質豊かな母親から受けた愛情を、義史少年目線で描いた物語は、時に切なさを漂わせながら、しかし、笑いにもっていくのです。「お父ちゃんとは反対に、お母ちゃんが生きているからこそ、いま描いとかなと思った絵本」だと長谷川氏は言います。

家族愛と人間味にあふれた大阪人絵本作家の人生ものがたりが、癒やしそのものなのです。

文献

- 1) 長谷川義史：それゆけ！長谷川義史くん、小学館、東京、pp.10-12, 52-63, 2017.
- 2) 講談社 編：絵本作家という仕事(長谷川義史)、講談社、東京、pp.124, 135, 2012.